



お産を通して見た二つの文化

瀬井 房子

助産院 ベビーヘルシー美蓓院長

私はつくば市の隣伊奈町に16年前開業している一介の助産婦です。

この16年の間に2000人以上の新しい命との出会いがありました。16年前の思い出を語るつもりではありませんが、私共の家族は夫の勤務先であるインドネシアに双子の乳飲み子と2歳の長女を連れて、空の旅人として飛行を楽しんでいたはずですが、限られた空間という密室での数時間を送っておりました折り、突然に双子の氾濫に出会い、他の多くの乗客の方々に大迷惑をおかけしてしまいました。その時困り果てた私に救いの手をさしのべて下さった数人のアメリカからの旅人が私の人生を根底から変えるような殺し文句を下さいました。

「自分たちへの感謝を次の人に返して下さい」この一言が私の第二の人生の基盤となり、その後15年を経て結果的に助産院開設へとつながっていった訳です。

今から約20年前と言え、金属バット

による両親殺し事件に始まって中学や、高等学校では、ガラスが割られ、机や椅子がすっ飛ばす様が連日のように、テレビや新聞を賑わしていました。

そんな折り私自身はある病院の中で身も心も疲れはて、全くの燃え尽き症候群状態で放り出されていました。二度とこの世界に身を置くことはやめようと思っていた矢先、私の目の中にお産に関する記事が飛び込んできました。「お産革命」1960年代頃から始まったフェミニズムの台頭、お産に関しても「もっと自然にもっと自分らしく」という主張が始まったという記事に出会いました。

ちょっと待てよ！お産って太古の昔からずっと続いてきた事ではないかしら、私達の小さい頃は妹や弟が生まれるとき、父がいて、お産婆さんが来て「わくわく」しながらみんなで待ってて赤ちゃんが産まれたっけ。今何で家で産まないのかしら？そんな素朴な疑問はあつ

たものの自分の時はやはり病院でお産をし、当たり前のように、ミルクと母乳の混合で育て今まさに子育ての真っ最中、助産婦の資格と経験を持ちながらも、やはり子育ては難しく教科書通りには事が運ばず、ずいぶんと迷いや、疑問だらけで今日まで来たことなどを考えると、今お産についてもう少し考え直してもいいのではないかな？と思え紆余曲折を乗り越えて16年前「お一人でも自分の思うお産がしたい方や、子育てに迷う方があったらお役に立ちたい」そんな思いで助産院を始めました。

助産院と言えば、当初は二の足を踏む方も多く、その推移を統計で見ると1990年家庭分娩や、助産院分娩は全分娩数の0.01%だったのが最近の統計では2%近くになってきた数字を見てもお分かりかと思いますが人々は確実に自分のお産を選び始めたように思います。

助産院だから、病院だからと言う分け方はしたくないと思いますが、最近の傾向として男性のお産への取り組み方が非常に積極的になった事は女性としても、助産婦としても大変嬉しいことで、妊娠中から積極的に外来診察にも参加され、お産の時は誰よりも優しく、妻をいたわる姿には微笑みよりも尊敬の念に駆られます。またそんな両親の元で産まれてき

た子供達の表情のよいこと、お産も色々あって、時間的に長くかかるお産や、初産なのに驚くほどの早いお産の方等々ありますが、産まれてくる子をじっと見ていますと大変楽しく、勿論お産は女が命を懸けて10ヶ月はぐくみ育ててきた大切な我が子を命がけでこの世に送り出すという大変な作業ですが、目に見えぬほど小さな細胞を10ヶ月賭けて億単位の細胞を持った一人の人間を作り出すのですから女性ってすごいな—いつも思います。

その厳かな儀式によってこの世に仲間入りする新生児は立派に個性を持ち、生まれるときから自己主張をしながらこの地球上の一人として仲間入りするわけですが、その生まれるときの表情をつぶさにみられるのも助産婦の特権かもしれません。生まれてくるときの赤ちゃんの表情がとっても素晴らしく、ながい時間かかって出てくる子は「あーつかれた」と言う表情をしています。またお母様が陣痛がつかなくてちょっとパニックになった方の子は「うーくるしかったよー」と言う表情で、一概には言えませんが大泣きをするような気がします。

又ある子はとっても嬉しそうな表情ですぐ「にっこり」ほほえみずなんて書くときっと「そんな馬鹿な」と信じていた

だけないかもしれませんが、本当なのです。きっと産みの現場だからこんな観察が出来るのかもしれませんがね。

さてこうして産まれた子が、母の胸の中でしっかりと抱きしめられ、まだ出ぬ母の乳房をまさぐる時、親も子も不慣れな授乳に苛立ちながらも、自分の力で吸い取らねば空腹は満たされないことを悟り、辛抱強く母の乳房を吸い続ける事によって、「集中力と忍耐力」が育まれていくのではないかと、勝手な仮説を立てているのです。

話は変わりますが、先日私はアフガニスタンに出かけてきました、まだ暫定政府が発足したばかりの翌日にアフガニスタンに入国しました、「何故出かけたのか?」と申しますと、昨年9月のアメリカにおける同時多発テロに引き続き、アフガニスタンの一般人をも含めた戦火の中で一番難儀をしているであろう女性や、子供達への支援と言うことでマザリーシャリフに助産院を作りに行きました。私も子供の時に終戦の経験しており、その時の悲慘さを身を以て味わっているだけに、彼の地の人々のことが他人事ではありませんでした。行ってみて確かにキャンプ生活をしている人々の生活は本当に気の毒になるような、地面に穴を掘って、夜露をしのぐためのテント、と

言ってもつぎはぎだらけの布を屋根状にかけて、その中で水も充分にはなく、お手洗いも「女性には近くの家を借りたり、建物の陰で用を足したり、男性はほとんどそこで用を済ませる」といった具合で、それでいて女性はいつも「妊娠してるのではないか?」という不安を抱えての生活、私達「日本医療救援機構(IDP)」のメディカルチームが仕事を開始してまもなく、助産院は立ち上がりました。1ヶ月余の間に16人の赤ちゃんが産まれた時点で政策が進み IDP キャンプが次々になくなり助産院は事実上閉鎖されました(暫定政府は出来るだけ早く人々を元の村に帰すべく IDP キャンプの閉鎖を打ち出し食料の供給を村単位で行う方法を探ったため)しかし驚いたことには、お産をなさったお母様方は赤ちゃんが誕生しても2時間ほど休んで、ほとんどの産婦さんが生まれたばかりの赤ちゃんを胸に家に帰ってしまうのです。その逞しさ!! また想像以上に子供達が元気なのです。同じボランティアで活動していた、アメリカのノースウエストチームの小児科医ニールが最初に出会ったとき「ここは90数%以上が母乳だよ!」と叫んだことを覚えています、短い期間でしたが町中では乳瓶を見かけなかった事は特記に値する事と信じます。

冬というのに「裸足、薄着」でかけずり回っている子供達の姿を見て、日本も57年前の戦後当時は履く下駄も靴もなく冬の雪の日にも裸足で学校に行く事が当たり前の時代があったことを知っている世代が少なくなってきた現代、物質文明が進み、衛生教育の成果のおかげで、生活環境がぐんと向上し、生活水準が上るに伴い文化生活と言われる欧米諸国と肩を並べるにたる生活様式の流入は、喜ぶべき現象だったかどうかの議論は別に子供達が非常に大切に、繊細に育てられるようになったと言ってもいいでしょうその結果、デリケートなうすいガラス細工のような子供達が育ち、指でちょっとはじくとぱりぱりと音を立てて壊れてしまう”ような子育てをしているのではないだろうか？”という疑問を持ちました。そして育児が出来ないヤングジェネレーションの子育てが育児ノイローゼや幼児虐待などと言う形として出てきているのではないかと思います。

アフガニスタンは20数年に及ぶ内戦の結果もたらされた惨状の後に立ち上げられた暫定政府で、一時的には女性の社会進出をも拒まれてきましたが、解放後は女性の進出に道をあける柔軟性を持っている点、日本の戦後と比べちょっとちがうかな？と言う感も否めません。お産を

通して二つの文化の推移を推し量るとき日本は50年前に言われるままにお産の様式を変えました。そして今一部の人々が従来のお産を取り戻そうと頑張っている。一方で、アフガニスタンはまだまだ自然のお産を継承している。この両者を見ながら、復興の足音高いアフガニスタンの人々に、どうぞ現在も残るアフガニスタン独自の文化を保ち続けてほしいと痛感します。折角家でお産をしているものをあえて施設に持っていくことなく、今のままの暖かいお母さんの胸に抱かれて母乳で育ててほしい。

また今のままの逞しい子供達であってほしい、アフガニスタンの子供達が逆境にもめげず、自分なりに生きるすべを自分で探し、例え教育は受けてなくても生きる知恵のある人々、たとえ分厚い瓶の底のように分厚いガラス細工でもいい元気で丈夫に生きていくうちに必ず知恵は湧いて来るものそんな思いを抱きながら、帰国の途につきました。

ところが帰国してまもなく出会ったアフガニスタンの女性から、「昔、国にいたとき、姉のお産の現場にいたけど、お産婆さんが間に合わなくて、姉はしゃがんだまま、母が前から赤ちゃんを受け取った、自分も2人の子供は国で産んだけど日本に来て3人の子を大学病院で産

んだけど、あんな格好をして産まなければならぬのが文化的なのかと思っていただけ、本当は座りたいよね」と言う話をしておられました。

二つの国のお産の現場を見るとき、人の営みは洋の東西を問わず、安全で楽なお産を望むことは共通点であると思いました。文化の発展が遅い子を繊細なか

弱い子にするのではなく、どんなことにも立ち向かっていける強い逞しい子育てをしてほしいと思いつつこの章を終えたいと思います。一介の市井の助産婦にこのような場を与えていただきましたことを心より感謝します。

(せいふさこ

助産院ベビーヘルシー美蓓院長)

